

日本フランス語フランス文学会

cahier

06

septembre 2010

I 2010 年度春季大会の記録

〈特別講演〉

Après Proust : Stratégies de la mémoire aujourd'hui

Dominique RABATÉ

司会・報告 三ッ堀広一郎 1

〈ワークショップ〉

1 フランス研究・フランス語教育の現状と課題

小野潮 5 古石篤子 6

越森彦 7 大槻多恵子 7

澤田直・土屋良二 8

2 文学の条件 — 第三共和制を考える

千葉文夫 9 中野知律 10

塩塚秀一郎 11 鈴木啓二 12

3 シュルレアリスムの何が未知のままか

鈴木雅雄 13

4 文学研究と BD

森田直子 17 古永真一 18

笠間直穂子 19

5 人文学の現在と未来 — 映画『哲学への権利 — 国際
哲学コレージュの軌跡』をめぐって

西山雄二 21

II 書評

中内克昌『アキテーヌ公ギヨーム九世 最古のトルバドゥー
ルの人と作品』

井上富江 24

鷺見洋一『『百科全書』と世界図絵』

小関武史 26

大矢タカヤス『地図から消えた国、アカディの記憶：『エヴ
ァンジェリヌ』とアカディアン』

小畑精和 28

Masahiko KIMURA (木村正彦), *Le Mythe du Savoir : Naissance
et évolution de la pensée scientifique chez Paul Valéry
(1880-1920)*

塚本昌則 30

小黒昌文『ブルースト 芸術と土地』

和田章男 32

Après Proust : Stratégies de la mémoire aujourd'hui

Dominique RABATÉ (Université de Bordeaux III)

司会・報告　三ッ堀広一郎（早稲田大学）

プルーストの『失われた時を求めて』は、執筆行為を時間や記憶に、小説を自伝や理論的言説に、みごとに融合させている。文学の枢要な課題の総合を試み、またそれを比類なき仕方で解決したことが、「大聖堂」たるプルーストの作品のauraを保証し、またその書き換えや批評的再読を促してもきた。じっさいジョルジュ・ペレックはプルーストの一句を変奏する言語遊戯の試みによって、ジュリアン・グラックはプルーストを「終着駅」と呼ぶことによって、現代文学が避けがたくプルーストの陰のもとにあること、だがしかし、プルースト以後の道が切り開かれるべきであることを暗示しているように思われる。したがって、記憶の問題に定位しつつも、現代の小説および自伝的著作から浮かび上がってくるポスト・プルースト的な美学について、図式化を恐れることなく、そのパノラマを描き出してみたい。そのさいの視点は、1) エクリチュールの断片化、2) 記憶の喪失や欠落、3) 他者の記憶、4) 記憶の虚構性の四点にわたる。

1) 連続体を制作すること

ジャン＝ポール・グーはエッセイ『連続体の制作』で、散文が断片化への誘惑に抗して連続体を形成する働きについて、興味ぶかい考察を展開している。だが認めざるをえないのは、プルースト特有の息の長い文によって保証されていた回想の連続性が、今や失われていることだ。過去は、有機的な繋がりや欠いたばらばらの断片としてしか戻ってこない。したがって現代の自伝は、あえて反プルースト的な立場に立って、記憶の解体を強調してきた。「ぼくには子供の頃の思い出がない」という挑発的な一句で始まるペレックの『Wあるいは子供の頃の思い出』、欠落と宙づりに満ちたナタリー・サロートの『幼年時代』、「崩壊のあとの残骸」を提示するルイ＝ルネ・デ・フォレの『オスティナート』は、いずれも文脈を失って孤立した思い出の断片を、断片のまま並べてみせる。

また『W』は、フィクションという術策を弄して、断片のあいだに走る裂け目を縫合しようとする。

現代の自伝は、全体を形成することのない破片、だがまさに破片であることによって輝きを放つ記憶から成り立っている。クロード・シモンには、初期からプルーストの影がつきまとっている。だがシモンは、その影響を逃れるべく、フォークナーに範を仰いだように思われる。『フランドルへの道』は、プルーストにおけるマドレーヌ菓子の挿話とは違って、語り手が意識を失った瞬間を中心に組み立てられている。失神という自己喪失が触知不可能な中心となり、その周囲をめぐりながら同じ話がいくたびも蒸し返される。シモン最後の著作『路面電車』は、「小説」と銘打たれているが、シモンの作品のなかでは『植物園』と並んで最も自伝に近い。『路面電車』では、明示的にも暗示的にもプルーストがふんだんに参照される。だがシモンにあっては、少年期と老いて入院している時期の二つの時系列は隔てられたままで、プルーストにおけるような発見によってその二つは繋がらず、かえって記憶の曖昧さが浮き彫りになってくる。

2) 失われたもの、欠落したもの

現代における記憶の問題の根底にあるのは、プルーストにおけるような「見出された時」であるより、むしろ根源的な忘却である。最後の啓示によって忘却が贖われるプルーストとは逆に、プルースト以後の作家たちは、忘却を強調する方向に向かう。

パトリック・モディアノにもプルーストの影がつきまとっているが、彼の場合、グリザイユや淡彩画を思わせる筆致を通じて、「忘却の最も深い淵から」いっさいが書かれていることを示そうとする。薄れゆく記憶というテーマは、『悲しみ荘』以降とくに際立ってくる。この小説では、早くも冒頭から、過去と現在の距離が強調される。モディアノの作品は、時とともに流失するものを甦らせようとする点でプルーストを踏襲しているが、思い出は不完全な指標でしかなく、記憶は完全には戻ってこない。パスカル・キニャールの作品では、記憶の頼りなさが、いっそう強調される。小論集を含むキニャールの作品すべては、「失われたもの」を言葉にする作業として読むことができる。感覚的なものを介して追憶を重ねてゆく点で最もプルースト的な小説と言えるのが『ヴェルテンベルクのサロン』である。だが、そこで浮き彫りになるのは、作中人物たちそれぞれの思い出の不一致である。永遠に失われたものが、この小説に、消し去ることのできない翳りを与えている。

ブランショは、生あるものを捉えるべく後ろを振り返る視線がかえって死を与えるということから、オルフェウス神話に、ものを書くことの寓意を見た。この意味でのオルフェウスの形象が、プルースト以後を特徴づけている。たとえばダニエル・メンデルゾーンの『失われた者たち』（原題：The Lost、仏題：

Les Disparus) は、第二次大戦中ウクライナで虐殺された親族の痕跡を探す物語だが、過去を振り返ったすえに見出されるのが死者であるという点で、オルフェウス神話の構図がここからも浮かび上がってくる。

3) 他者の記憶

『失われた者たち』は、主体の個人的記憶より、むしろ他者にかかわる記憶を繰り返す。この点は、20世紀をしるしづけた歴史的事象、すなわち第二次大戦における絶滅収容所の問題と密接に関連している。他者、とりわけ死者の記憶を再構成するための手がかりは、プルーストにおけるように独我論的な主観性に立った個人の生きた回想ではなく、アーカイヴの探索と収集のうちに求められる。現代に特徴的なこうした傾向は、モディアノの『ドラ・ブリュデー』に如実に認められるし、収容所との関わりという点ではペレックの『W』も念頭に浮かぶ。フランソワ・ボンの『メカニック』は、亡き父をめぐる、また父とともに過去のものになった一時代をめぐる綴られている点で、作家自身にも間接的に関係してはくるが、しかし個人のうちに閉ざされてはいない集合的記憶のほうに焦点を移していると言える。

メキシコの作家ホルディ・ソレルによる祖父母の痕跡をたどる物語、ジョルジュ・ペレックの『ぼくは思い出す』、美術家クリスチャン・ボルタンスキーのインスタレーション。これらはいずれも、時代や社会にかかわる集合的ないしは匿名の記憶と個人史の狭間でおこなわれた試みである。こうした傾向は、自伝的な事柄を任意の他者のものであるかのように語り、時代の変化を示すサンプルとして自分の人生を差し出すアニー・エルノーの『歲月』のような試みにも通じてゆく。

4) フィクション?

現代の作家は、回想の作業につきまとう虚構性を際立たせる。「記憶の場所」を想起するプルースト以来の系譜を辿ることで、これを示すことができる。『失われた時を求めて』の冒頭では、目覚めぎわの語り手がかつて過ごした寝室を思い出すことで、はじめてプルースト的な主体と、その特異性が立ちあがってくるのだった。ペレックの『さまざまな空間』では、かつて眠ったことのある寝室の目録づくりの企てが語られ、またさまざまな場所が列挙されてゆくが、ペレックのこうした試みが浮き彫りにするのは、主体の個性ではなく、その社会的ないしは集合的な次元である。かつて泊まったホテルの部屋を列挙してゆく点で、プルーストおよびペレックの試みの延長線上に位置するオリヴィ・ロランの『クリスタル・ホテルのスイートルーム』には、スパイ小説のパロディがまじえられる。こうして回想の文学にあっては、虚構の領分が増してきているのが確認できる。

架空の書き手バンジャマン・ジョルダヌの名で作品を発表するジャン＝ブ
ノワ・ピュエシユの試みからも分かるとおり、現代の作家たちは、主体の虚構
性に意識的である。キニャールの『ヴュルテンベルクのサロン』は、きわめて
ブルースト的な作品であるが、ブルーストが実現した小説と自伝の見事なバラ
ンスを、もはや保つことができていない。語り手カールには、たしかに作者キ
ニャールの像を認めることができる。だが、虚構の案出が示しているのは、主
体における真実の欠如なのである。この点で示唆的なのが、小説末尾における
素焼きの磁器の挿話である。過去の全的な蘇生を保証するはずのこのオブジェ
は、かえって記憶の錯誤を告知し、フロイトが夢に認めた圧縮と置換の働きに
よって思い出が歪曲されるものであることを示している。語り手は、みずから
の起源に触れることはできないが、欠如した起源は、虚構への欲望をかきたて
るのである。

*

こうして見てきたように、現代の回想文学を支えるもろもろの戦略は、ブル
ーストとの偏差を測ることによって、その輪郭をあらわにする。もはやブル
ーストのように書くことはできない。ブルーストのように、「真実の生」との和解
をもたらす文学の恩寵を信じることはできない。さらに 21 世紀に入って、オリ
ヴィア・ロザンタールの『消え去るためにいるわけじゃない』に見られるよう
に、アルツハイマー病が、記憶をめぐる諸問題を集約して示す新たな隠喩とな
りつつあるのかもしれない。今やエクリチュールは、徹底的な忘却、回復不能
な人格の崩壊、自己自身に対して他者となった主体に向き合っているのだ。

ワークショップ1

フランス研究・フランス語教育の現状と課題 (日本フランス語教育学会との共催ワークショップ)

コーディネーター：澤田直（立教大学）、土屋良二（津田塾大学）

パネリスト：小野潮（中央大学）、古石篤子（慶応義塾大学）、越森彦（白百合女子大学）、大槻多恵子（聖ウルスラ学院英智高等学校、仙台白百合女子大学）

日本フランス語フランス文学会（以下SJLLF）と日本フランス語教育学会（以下SJDF）は6年前からフランス語教育国内スタージュを共催してきたが、本年度は、語学教育実情調査を合同で行うこととなった。この機会に両学会が共有する研究と教育の現状と課題を、1. 研究と教育のありかた、2. フランス語教育の目的の多様化に応じた教育のありかた、3. 高大連携を視野に中等教育におけるフランス語の問題の3点にしばって検討することが、本ワークショップの趣旨であった。

今回のフランス語教育実状調査を取り巻く環境とその目指すもの

小野潮

日本のフランス語教育を取り巻く環境は大きく変化している。憂慮される変化としては、第2外国語の軽視、第2外国語の中でのフランス語のシェアの減少、専門教育における英語以外の文献の講読の割合の減少などである。他方、肯定的な変化としては、ネイティブによる授業の増加、学習者を取り巻く音声環境の改善、検定試験の発展、留学する学生の増加、フランス語話者の増加、中等教育におけるフランス語教育の進展、CALL教育の発展などがあげられる。

SJLLFはこれまで6回のフランス語教育実状調査をおこなって、実態把握に努めてきたが、最後の第6回の調査からもかなりの年月が経過した。また第5回、第6回調査は、大綱化に伴う情勢の変化を捉えようとする意図から、特定の課題に特化する形の調査となっていた。今回の調査では、今後、経年変化がたどれるような形のものを目指している。モデルは、教員の意識、学生の意識を丁寧に問うた第4回調査だが、これに加え、フランス語教育を実施している教育機関についての調査も併せておこない、より多面的な調査を目指す。以下が基本方針である。

①基本的な数字の把握に努める。②すでにある既存の数字、ネットにより得られる情報の活用に努める。③教育機関、教員、学生のそれぞれについて傾向が把

握できるよう努める。④過去の調査の対象にならなかったこととして以下の項目についても調査をおこなう。1) ネイティブ教員による授業、2) CALL教育の浸透、3) 検定試験のフランス語教育に果たす役割、4) 留学制度(長期留学、短期留学)、5) 中等教育におけるフランス語。⑤今後の調査の際に経年変化が見られるような項目設定を考える。⑥調査結果の冊子体の印刷・配布はおこなわない。

調査に際して、フランス語教育に携わられている教育機関、教員の皆さまのご協力が不可欠であり、この場を借りて積極的なご協力をお願いする次第である。

〈構造的不況〉のフランス語教育業界 ― 現状打開の道を探る

古石篤子

現在のフランス語教育の「不況」は構造的である。その改善には部分的な手直しでは効果がなく、原因の徹底的な解明とそれに基づく改善策が必要とされる。根本的原因のひとつは、わが国の教育制度全体が未だに19世紀型国民国家形成に基礎をおく古い発想を抜け出ることができないことである。外国語教育制度は、明治以来の「英独仏のトロイカ体制」(鈴木孝夫)を無反省にひきずっており、英語を中心とした異常なまでの「モノリンガリズム」に陥っている。他の要因は、言語教育一般に対する社会の認識不足と、教える当事者自身のプロ意識の欠如であろう。この現状を打破するために次の2つの提言を行った。

1. (大学で)「外国語としてのフランス語」(以下FLE)を教えるものは、自らのメチエのダブルメジャー性に自覚的であれ。2. FLEを教える者は、そのための専門的知識および技術の習得のための研修を必須とし、教員を採用する教育機関は、研修修了証明書を採用の条件とすべし。

「ダブルメジャー」とは「2つの専門領域を持つ」ということである。FLEに携わる教員の多くは、文学、言語学、哲学、社会学、歴史学等々の高度の専門研究領域を持つが、FLEを効果的に教えるには「フランス語教育学」とも呼ぶべき領域の専門性こそが必要となる。「フランス語を教える」という日々の営みにおいては、自らの専門研究領域とフランス語教育学との2つの専門領域に関わっていることを自覚し、自己研鑽すべきである。

提言2は教員養成の重要性を述べている。世の多くの職業では、専門職であればあるほど定められた養成期間を経た上での資格取得が必須である。外国語教員でも中等教育教諭はそうであるが、なぜか大学だけは「治外法権」特区となり、何の資格も実習も不要なのである。このような「特権」は廃止されるべきであり、教員を採用する側も、応募者がFLE教員としての要件を満たしているかどうかを適切に評価する目を持つ必要がある。

文学研究者がフランス語の授業をするとき：その困難と工夫

越森彦

文学が専門であった自分にとって、語学の授業は困難の連続であった。一番困ったのは、教科書を開いて教材研究をしようとしても、どういうふうに授業をしていいのかわからないことである。このような事態が発生する原因としては、—— 私個人の力量不足はもちろんとして ——、なんの訓練も受けずに教師になれてしまう、という現実があるのではないだろうか。そして、その現実の背景には、教える内容に関する知識があれば、語学の授業ぐらいなんとかなるといふ「勘違い」もあるのだろう。

語学授業の運営と準備に関する困難を、文学研究者はどのように克服できるのだろうか。私としては、以下の点に注意している。①3分以上続けて話さない。②授業を疑問文と具体例の集積にする。③音読の練習パターンをできるだけ多くもつ。

学生のレベルを上げ、別の世界があることを伝えるために以下のようなこともしてみた。

- ・二年生の教科書を文学作品のリライト版にした。(CLE International の *La Parure*)。授業の際には訳すだけでなく、上記の練習パターンを使って音読練習もたくさんした。

- ・ある文法事項を説明する際に、文学作品から取った例文を(最後に)付け加える。このときのコツは、あくまで今思い出したかのように話すことである。

- ・教科書に出てくる固有名と写真は、フランス文化を紹介する最大のチャンスなので、必ず説明をする。

- ・個々の単語・熟語がもつ歴史的・文化的背景を(ボソッと)説明する。

語学の授業における「雑談」は、文学研究者の腕の見せどころである。

フランス語の授業は楽しい。自分なりに工夫をしてうまくいったときの喜びは、一人で論文を書いていたときには味わえなかったものがある。しかし、うまくいかないときと悲惨である。これからこの「業界」に就職しようと考えている若手の文学研究者は、自分の仕事の大半がフランス語を教えることになることを忘れないでほしい。

中等フランス語教育よりの発信

大槻多恵子

国内約390校において約9千人のフランス語履修高校生が存在し、5部に分類される。

A：中高一貫のフランス語1外教育を実施する私立校

- B：高校入学時よりの1外フランス語教育を実施する公・私立校
- C：高校入学時よりの英仏2言語並列の複言語教育を実施する公立校
- D：外国語教育特化校における2外フランス語教育
- E：一般公・私立校での2外フランス語教育

日本のフランス語教育の未来を考える上では、今後の高等教育におけるフランス語履修者数の増加だけに焦点を合わせるよりは、来るべき多文化共生社会の到来に合わせた複言語教育の導入を予測して、中等教育でのポテンシャルを考えるべきである。

複言語教育の必修化を待ちながら、準備すべきことが多い。まずは中等フランス語教育をより促進するための大学入学試験での複言語評価である。大学センター試験における「東大方式」の入学試験制度が導入されることは究極の目的となるが、それ以前には推薦試験制度に、何らかの形で複言語評価を取り入れている大学の一覧をサイト上に掲載するなど、中等教育における強力な理論武装の手段となる。

また、忘れてはならないのが中等フランス語教育の教員免許状保持者の養成である。教員免許養成課程の内容の変化や、実習時期と就職活動のぶつかり合いなどから、近年免許取得者が非常に減少している。これには実際免許取得者がいても、2外教育の場合、1校当たりでのフランス語授業開講数が専任教員としての採用をする必要性に及ばないという問題点もある。ところが逆に英・仏の両免許を所有する教員のニーズは非常に高いものであることは大学側に知られてはいない。英文学を専攻して、高校の英語教員になる学生がたくさんいる一方で、なぜフランス文学を専攻して高校のフランス語教員を目指す学生が出てこないのか？ 大学側はもっと、中等教育の持つポテンシャルを認識し、学生たちのキャリア・デザインとして、そこで活躍できる人材の育成に熱意を持ってもらいたい。

コーディネーターからの言葉

澤田直・土屋良二

小野さんの発表が明らかにしたように、フランス語教育の現状を経年観測できるような調査を行い、実態をきちんと把握することは重要であり、今回の両学会の共同調査は有意義である。研究と教育のありかたに関しては、研究か教育か、という二者択一的な発想ではなく、研究も教育も、という発想が重要だと思う。その意味で、古石さんが強調したように、教師が各自ダブルメジャーの自覚をもつことが重要である。フランス語を教えることはひとつのメティエであり、基本的なスキルなしにできるものではない。文学研究をもつぱら行ってきた人たちが、教壇に立つ前に語学教育に強い関心を持つべきである。しかし、それは研究者的

態度を捨てることを意味しない。大学という高等教育の場面では専門的な知識に裏打ちされた教育が必要であり、実用性ばかりに傾かない授業をするために研究的スタンスは忘れるべきではなからう。近年の文学研究は、文化史的、社会史的、表象文化的アプローチなど多岐にわたっている。研究を教育の現場に反映させることが、工夫しだいで可能なことは、越さんの発表からもよくわかる。大槻さんから多くの示唆に富む指摘があったように、大学教員は中高でのフランス語教育に関して、これまで以上に強い関心を持つ必要がある。

活動領域の異なる各パネラーの報告に対して、会場から多数の質問やコメントが寄せられ、ワークショップの名にふさわしい活発な議論が展開した。会場に集まった聴衆は100人を超え、座れない方がでるほどの盛況であった。フランス研究およびフランス語教育が置かれている現状と抱える課題に関して、とりわけ研究者としての専門性と語学教師としての技能をいかに両立させるかという問題に関する関心の高さを改めて確認する機会となった。両学会の垣根を越えて広い視野でフランス研究・フランス語教育を考えるという試みは今回を問題提起として、今後も継続して行きたい。

ワークショップ2

文学の条件 ― 第三共和制を考える

コーディネーター：千葉文夫（早稲田大学）

パネリスト：中野知律（一橋大学）、塩塚秀一郎（早稲田大学）、鈴木啓二（東京大学）

千葉文夫

コンパニオン、トドロフなど、文学を問う著作活動が気になる昨今である。われわれもまた、文学のチカラを問い直すための場を必要としているのではないか。本ワークショップはその場となるべく、二つの間を絡み合わせる。すなわち書く行為のリアリティに迫ろうとするミクロ的問、フランス文学のイメージ形成に大きな役割を演じた第三共和制をめぐるマクロ的問である。中野知律は、文学教養が大きく揺らぐ時代の転換点にあってブルーストがどのような選択を果したのかを問う。塩塚秀一郎はクノーおよびペレックの仕事をもとに、遊戯的なよそおいをもつ作品世界の背後に第三共和制の現実がどのように透けて見えるのかを報告する。鈴木啓二は文学を条件づける政治・歴史的背景の読

解をこころみる。千葉文夫はレリスが参加した民族学調査旅行が国家的事業であったことを確認しつつ、文学的営為が開始される瞬間に眼をむける。

以上が春季大会プログラムに掲載されたワークショップの紹介文であり、このプログラムにしたがって、作家研究の成果を生かしつつ、それと同時に、作家研究の枠に閉じこもることなく、より広範な第三共和制をめぐる問いをどのように絡めて考えるのかという意識をもって議論が展開されることになった。このワークショップに先立ち「記憶を書く ― プルースト以後」と題するドミニク・ラバテ氏の特別講演がおこなわれ、その冒頭から、プルーストとペレックの名が喚起されたのは、偶然とは言いながらも、ラバテ氏の関心とわれわれの関心が交錯するものであったことを示している。

二つの文学病

中野知律

マルセル・プルーストは生涯において二つの小説の執筆を試みている。放棄された未完の世紀末小説『ジャン・サントウイユ』と、作家の死によって終結部が不安定なかたちにとどまっている『失われた時を求めて』である。プルースト小説の十年を隔てての書き直し、そしてその変容には、世紀末が抱えていた問題の解決が賭けられていたのではないかと思われる。

書くことへの妄執に憑かれて、読まれぬままに書き、あるいは書けない、書かない、書き上げられない、しかしその「不能」のうちでも「文学的不運」のなかでもペンを離さずに生きている、世紀末小説の作家主人公たち。〈書くこと〉に何らかの意味でネガティブに関わるそうした *raté* たちにおいて芽吹きかけていた“書くとはいかなることか”という問題意識を、プルーストがいかに受けとめ展開していくことになるのか、その方向性を示すことが、本報告の意図である。

『ジャン・サントウイユ』の執筆が開始されたのと同じ 1895 年に世に出た二つの書 ― 「皆が書き、誰も読まない」時代の「書く病」を告発するアントワーヌ・アルバラのテキストと、書くことに倦みつつ書き続ける主人公を擁した『パリュード』 ― に照らしてプルーストの修業時代を考えると、世紀末の憂鬱を抜け出そうとした作家の闘いの意味が見えてくる。

普仏戦争敗北後のフランスにおける教育改革議論が浮かび上がらせた書物的教養と人生経験・現実社会による習得という対立軸、そして、生に即して書く、生きられたものから書かれるべきものへの素朴な転移の夢を抱かせるレアリスム美学の残照のなかで、おそらくは文学史上初めて根底から掻き乱された生きること/読むこと/書くことの相関関係を、プルーストは自らの執筆実践を通して見極めようとするだろう。

読まずに書こうとする「書く病」が、実はもう一つの「文学的病」すなわち、文芸共和国の民が長らく守ってきた、読んで書く、読めば書けるという方策が陥り易い〈読む病〉と表裏するものであることを、ブルーストは見逃さない。

この二つの「文学的病」から自らも癒えるために、不透明化した創造の「法則」の究明を自らに課した作家は、新たな読書論の執筆（1905年）を経て、〈書きつつある主人公〉の姿を消しながら〈書くこと〉を主題化する小説の可能性を、『失われた時を求めて』において試していくことになるだろう。

ペレックあるいは記憶の痕跡

塩塚秀一郎

1969年、ジョルジュ・ペレックは「場所」と呼ばれる企てを開始する。パリ市内から自分の人生と深く関わる十二の場所を選び出して、毎月二箇所ずつ描写していくという試みである。二箇所のうち、一方は現場で行い、もう一方は描写対象とは別の場所で記憶だけをたよりに描写する。この企画は十二年間にわたり続けられるはずだったが、実際には1975年に放棄されてしまった。

残された草稿の中には、ペレックが両親とともに幼少期を過ごしたヴィラン通りの（現実描写）も含まれている。そこに記録された69年から75年にかけてのヴィラン通りは不健康で禍々しいとさえいえる雰囲気覆われている。再開発の波を受け、多くの建物は取り壊され、開かずの扉があちこちにみられるのだ。もっとも、ペレックの母をはじめ、ヴィラン通りで暮らしていたユダヤ人たちは根こそぎ連れ去られてしまったのだから、この場所は再開発で破壊される前に、すでにホロコーストによって破壊されていたともいえよう。ペレックによる記述は、最初の破壊を免れた「痕跡」が時の経過とともに破壊されてゆく様子を残酷に記録している。

ドキュメンタリー『エリス島物語』（1980）では、ペレックはポーランド系移民だった両親と自らの運命をアメリカへの移民たちに重ねている。この作品はいわば「ありえたはずの自伝」なのである。苦境を逃れてたどり着いた移民たちに新たな人生を開いたはずの移民局、エリス島はその歴史的役割自体によって強制収容所の陰画をなしているともいえるが、廃墟と化した移民局に残された雑多な堆積物も収容所のイメージを喚起せずにはいない。ペレックはこれら無数のモノを、移民たちの歴史、物語を一点に集約するものとして執拗に記録しようとしている。このようなモノへの執着の淵源に喪失の体験があることは明らかであろう。

ペレックの代表作『人生 使用法』（1978）においては、物語の舞台となる集合住宅が「廃墟」のイメージに重ねられており、そこにあふれるモノが執拗な描写の対象となっている。注目すべきことは、この小説を満たすモノの多くは

「制約」によって物語世界に持ち込まれていることである。つまり、ペレックに特徴的な制約に基づく書法は、従来言われてきたように「物語」を生み出すバネであるにとどまらず、放置すれば消え去るはずの「日常」や「並以下のもの」を記録するための装置でもあったのだ。ペレックの制約は彼の人生に課された制約の写し絵である、というルジュンヌの指摘はやはり核心を突くものと言えよう。

死者の遍在と共同体

鈴木啓二

本ワークショップに先立って行われたドミニク・ラバテ氏の特別講演では、現代フランス文学における、プルースト的モデルの再現の不可能性というテーマが、現代文学に遍在するジェノサイドの記憶との関係において論じられた。

これとは別の形ではあるが、第三共和制期もまた、死者たち、亡霊たちにとりつかれた時代であったと言える。

1930年に刊行された『フランス文化論』の中で、クルティウスは、民族移動と建国という「始源的体験」とその後の生成・発展というドイツ的歴史観を、他文化の摂取とその蓄積・存続という、フランスの「歴史的感覚の欠如」と比較し、フランスにおけるこうしたパランプセスト的な歴史的記憶のあり方を、「生者が死者に支配せられる」というコントの言葉や、モーリス・バレスの、「土地と死者」の思想の中に見出した。

有名な、ヴァレリーの『精神の危機』の中にも、ライン河の段丘に立つハムレットが、「幾百万の亡霊を眺めている」場面が描かれている。ここでは、単なる、過去の遍在という点よりも、過去の無限反復と不断の革新の狂気という二つの「深淵」の間で、「流動的均衡」を打ち立てることの困難が強調される。

指摘すべきは、これらいずれの場合も、死者の遍在が、排他的な共同体の構築と、直接・間接に結びついているという点である。バレスにおいてこのことは明白である。彼はそれまで宗教が担ってきた社会的紐帯創出の機能を、地上的な死者たちの集合に担わせようとする（『ナショナリズムの情景と教理』）。ヴァレリーの文章に、そこまであからさまな、排他的な共同体への志向を見出すことはできないが、「第二の手紙」の最後に現れる、大海の中に拡散した赤ワインの数滴（＝世界中に拡散したヨーロッパ精神）が再度純粋な形で析出されるというイメージは、はっきりと、ヨーロッパ人の「血」や、ヨーロッパ文化の「精髓」の回帰を表わしている。

一方、ラバテ氏が述べた現代文学における死者の遍在は、こうした排他的な共同体の構築とは無縁のものとして描き出されていた。現代文学が語るのは、完全な消失を運命づけられた、もはや賦活されぬ過去であり、モナド的話者

による幸福な想起が不可能な死者たちである。これらの死者たち（と）の共同体が可能になるとして、それは、「故国」「国家」「家族」といった実体的存在への変容の契機を決定的に欠いた共同体、すなわち、J.-L.ナンシーが「無為の共同体」と名付けたものに等しいであろう。

*

三名の報告に引き続きフロアからの発言に移り、文学教育とレトリックの問題、ジェノサイド以前の作家としてのマラルメをどのように把握するか、さらには「読む」、「書く」の二項のほか、「読ませる人」、「書かせる人」という問題系を導入した場合に何が見えてくるのか、などの問いが発せられ、活発な質疑応答がなされた。会場には百名を超える聴衆が集まり、文学をめぐる問いが熱気をおびたものとなりうる印象を得ることができた。

ワークショップ3

シュルレアリスムの何が未知のままか

コーディネーター：鈴木雅雄（早稲田大学）

パネリスト：齊藤哲也（山形大学）、野崎歆（東京大学）、西谷修（東京外国語大学）

鈴木雅雄

シュルレアリスムを語るものは、それに加担するか、あるいは否定するかを選択しなくてはならないと思わせる何らかの力が、長きに渡って作用し続けてきたように思う。現在刊行されつつある叢書「シュルレアリスムの25時」は、そうした磁場から距離を取ることがやっと本当に可能になったという認識から出発するものだが、そこではこれまで日本では扱われることの少なかった（あるいはほとんどなかった）作家や画家に焦点が当てられ、シュルレアリスムを新しい角度から考え直すことが試みられている。シュルレアリスムとは何であるか、そのどこに価値があるか（あるいはないか）という問いではなく、この運動と肯定的にも否定的にもさまざまな関係を取り結んだ人々一人ひとりととって、シュルレアリスムがどのように機能したのかという問いを、いまや私たちは問うことができる。

今回のワークショップはこの叢書をきっかけとして、叢書の執筆者と、シュルレアリスムについて独自の視点を持つ論者とが意見を交換しながら、シュルレアリスムについていまだ十分に語られていない問題とは何であり、今後どのようなアプローチが必要となるかについて、考察しようとするものであった。この目的が十全に達せられたと主張するつもりはないが、世代も研究方法も、またおそらくはシュルレアリスムに対する見方も大きく異なった3人のパネリストの発表と討論は、多くの可能性を示唆してくれたように思う。

1.

「25 時」のシリーズではヴィクトル・ブローネルを扱った齊藤哲也氏だが、今回はアンドレ・ブルトンのテキストに立ち返り、緻密な読解によって、いたるところに現代のメディア・テクノロジー体験に類したものが見出されることを証明してくれた。驚くべきことに、扱われるテキストはどれもきわめて有名なものであり、『シュルレアリスム宣言』に含まれるかの「定義」からはじまって、自動記述の訪れを語る、「窓ガラスを叩くようなフレーズ」についてのパッセージ、「現実僅少論序説」冒頭の「無線」に関する記述、「言語＝視覚的」なオートマティスムに対する「言語＝聴覚的」なその優位を唱える「オートマティックなメッセージ」の一節などが、提示されては鮮やかに解釈されていた。どこからともなく届けられるあの「声」は「着信音」へ、「無線」の問題系はヴァーチャルな「携帯」使用者としてのシュルレアリストのあり方へと接続される。そのときシュルレアリスムに終始つきまとったといいいい「幽霊」のテーマもまた、メディアの体験として理解できるものとなるだろう。また「オートマティックなメッセージ」の文章からは「オーディオヴィジュアル」の問題系が引き出され、「言語＝視覚的オートマティスム」はサイレント映画に、「言語＝聴覚的オートマティスム」はトーキー映画に結びつけられた。

さらに重要なのは、こうした視点がシュルレアリスムの思考の本質に直結していることである。初期のエルンスト論に現れる、「à vue d'œil 目に見えて」といった表現はやがて意味を失うだろうという断言は、リアリティとヴァーチャル・リアリティの交錯を生きる「端末人間」の到来を告知するだろう。それは空間を介さない直接的な時間体験でもあり、ドゥルーズが『シネマ』で展開した時間論が引き合いに出されるのも、十分な説得力があった。

ただし齊藤氏の方向性は、決してシュルレアリスムをメディア論の課題を中心に据えた運動と捉えることではない。ブルトンが想像したかもしれない「新たな人間」の形象も、メディア・テクノロジーの体験と隣接しつつ、たとえば「愛」といったキーワードを決して放棄することなしに記述されるものであり、その両義的ともいえる性格こそがシュルレアリスムの可能性として受けと

められねばならないだろう。

2.

次に野崎欽氏は、最近刊行された、ブルトンから娘オーブへの手紙というやや意外な資料を中心に据えて、新しいブルトン像を描き出そうとしてくれた。

野崎氏自身の翻訳によって日本に紹介されている『性についての探求』のなかでブルトンは、子どもを持つなど考えることもできず、もしそんなことがあれば子どもの顔は見たくもないといい放っているのだが、これは約10年後にブルトンが『狂気的愛』最終章として発表したオーブへの手紙での切ないほどの呼びかけとは、同一人物の言葉と思にくいほどのコントラストを見せている。『狂気的愛』末尾の手紙は16歳になった未来のオーブに宛てられているわけだが、野崎氏は実際にオーブがその年齢になった1952年の手紙を引用し、反＝家族のイデオロギーを貫いた人という通常のブルトンのイメージに対して、狂気的愛が家族への愛に形を変えて存続しているという印象を強調してくれた。

この「子ども」という問題を念頭に置いたうえで『秘法17』が読み直されたのだが、そこで興味深かったのは、有名な「femme-enfant」という女性像が、「femme (女性)」ではなく「enfant (子ども)」の方に重点を置いて捉えると異なった理解があるのではないかという視点であった。ブルトンの最後の妻となるエリザは、彼と会う前に娘を失っており、それが当時娘オーブと離れて暮らさざるをえなかったブルトンの状態と共振したのだろうが、おそらくここには失われた子どもの「蘇り」というテーマがあるに違いない。それはさらに『秘法17』が書かれた第二次世界大戦中という状況ともつながり、戦争で疲弊した世界の「蘇り」を望む気持ちが、そこには重ね合わされているだろう。野崎氏はこの「戦争と子ども」というテーマの重要性を指摘し、さらにそれをサン＝テクジュペリにつなげて論じたが、これもまた意外かつ興味深い比較であった。

3.

最後に西谷修氏は、持ち前の自由かつ挑発的なスタイルで、齊藤、野崎両氏の発表にコメントを加えつつ、自身のシュルレアリスム観を展開してくれた。

まず西谷氏は、野崎氏が強調した、「愛の結晶」として子どもを捉えるようなブルトンのディスクールへの違和感を表明し、それとバタイユの視点とを対比して見せた。バタイユにとって人間におけるエロティシズムとは、繁殖という目的とも、子どもへの愛といったこととも無関係であり、したがってそこで考えられる「子ども」の存在とは、何の根拠もなく突然向こうからやってくるもの、「impossible」なもの（これを西谷氏は「ありがたい」と訳すべきだ

と主張する)であり、ブルトンのようにそれを神話化することはない。バタイユはあくまで、根拠はないが否定できず、ただ引き受けるしかない、そうした出来事を見つめ続けるのである。

一方齊藤氏の発表に対しては、ブルトンのよく知られたテキストを読み替えていく手際の見事さを確認しつつ、ブルトンが現在のメディア体験を「先取り」していたという表現は一度も使われなかったことを指摘してくれたが、これは非常に重要な指摘であろう。そのように語ってしまえば、ブルトンの体験は結局現在のメディア環境のあり方に統合され、それを肯定することになってしまう。そうではなく、シュルレアリスムが示しているのは、メディア技術がない時代にさえその体験は可能だったという事実、現在の社会環境が決して唯一可能なものではないという事実なのである。したがって、IT環境をめぐる議論でも、あるいはアートの領域で言われる「ポストヒューマン」の問題系であっても、それに対しシュルレアリスムは、単純に人間性への回帰を求めるのではないにしろ、しかしまた別の「人間性」を求め続けたと、評価できるのかもしれない。

パネリストのあいだで交わされた活発な議論については省略せざるをえないが、テクノロジー的なものと直接的な身体性のあいだで宙吊りになったものとしてのシュルレアリスムのあり方、ブルトンとバタイユの対比のなかで、エロティシズムだけでなく「愛」という問題をどう捉えるか、等々さまざまなテーマが議論されたことを付け加えておく。

結局はブルトンが議論の中心になってしまったので、通常シュルレアリスムの領域と考えられている範囲を自由に逸脱していくような方向には展開できなかったが、ブルトンをめぐってさえ無数の語られざるテーマを掘り起こせることは確認できた。最後の方で野崎氏が、「25 時」のシリーズでも扱われているクロード・カーアンについて、既存のシュルレアリスム像を脅かす存在であることを示唆してくれたが、こうしたワークショップを、シュルレアリスムをめぐる思考の場そのものの持続的再創造へとつなげていければと思う。

文学研究とBD

コーディネーター：森田直子（東北大学）

パネリスト：古永真一（早稲田大学非常勤講師）、笠間直穂子（上智大学非常勤講師）

森田直子

フランス語圏の漫画すなわちバンド・デシネ *bande dessinée*（以下 **BD** と表記）は、1950年代までは子供向け読み物としてフランスでもほとんど批評の対象となることがなかったが、60年代以降は推理小説やジャズなどととも反体制文化の一分野として認知され、当時の記号論の隆盛をうけて学術研究の対象としても扱われる機会が増えていった。さらに1990年代以降は、シリーズもの **BD** の規格化されたイメージを塗り替えるような表現スタイル・テーマ・版型の多様化、芸術性・文学性の追求が一部の作家において見られ、幅広い読者層を獲得するに至っている。アングレーム国際 **BD** フェスティバルが毎年注目を集めるなど、現在 **BD** は文化的にも認知度が高くなっている。

伝統的に翻訳ものが大きな位置を占めてきた日本の文学書出版事情とは異なり、海外の漫画は、日本の漫画市場のなかで確固たる地位を得ているとはいえない。とくに **BD** の場合は絵本やグラフィックアートとしても分類しうるため、書店で定位置を得にくいという事情もある。しかし近年では、**BD** 作家の相次ぐ来日や翻訳・書評等を通じて、日本でも **BD** 読者は増えつつある。

BD と呼ばれるものは日本語の「漫画」（新聞戯画なども含む）よりも範囲が狭く、一般にはコマやフキダシを備えた、ある程度の長さをもった物語形式のものを指す。その意味で文学に非常に近いジャンルといえるが、同時に **BD** は独自の表現装置を活かしながら展開してもいる。本ワークショップは、文学研究の対象の枠を **BD** にまで広げてみることで文学研究と **BD** 研究をともに活性化しうるのでは、との仮説のもと、現代の **BD** に関して造詣の深い古永真一、笠間直穂子両氏の参加を得て企画された。仏文学会で初めて **BD** を論じる機会を設けていただいた主催校のご高配に感謝したい。

1. 19世紀の絵物語における身体・語り・自己言及

森田直子

森田の発表は、前置きとして **BD** 全般の表現形式や出版媒体の通時的変遷を

簡単に紹介し、19世紀における絵物語と20世紀におけるBDの展開との関連を探ることを目的とした(bande dessinéeという語の出現は1930年代、普及は50年代末以降)。本稿では、19世紀の絵物語における、図像性を活かした物語構築と文学的技法との関連についてまとめる。

先にBDは物語形式をとると述べたが、その物語とは概して特定人物の運命の変転を描くものである。現在見られるようなBD表現の創始者といわれるロドルフ・テプフェール(1799-1846)には、顔および全身のポーズ・しぐさについての記号的な関心が見られるが、その背景には単純な描線で描かれた人物を中心として物語を効率的に展開させようとする意図がある。描かれた顔と、そこから推測される性格や感情との関連をめぐる実践的考察をまとめた自著『観相学試論』(1845)はよく知られるが、近年では、テプフェールの描く人物のポーズが、身振りや演技の修辞法に関する同時代の演劇論を下敷きにしての可能性も示唆されている。

テプフェールの描く人物は概して全身像であり、図像による語り(呈示)は常に第三者の中立的な視点からなされる一方、テキストは三人称を基本としつつ、ときおり特定の人物に「内的焦点化」した語りとなされる。これに対し、シャム(1818-1879)、ギュスタヴ・ドレ(1832-1883)においては、すでに図像表現レベルでの(作中人物の)主観的視点の呈示が大胆な形で試みられている。

この時期の絵物語における文学的技法とのもう一つの重要な関連は、メタフィクション的(自己言及的)表現に見られる。白一色・黒一色のページ、創作過程の露出、過去作品へのオマージュなどには、『トリストラム・シャンディ』からの影響も指摘できるが、絵物語というマイナーな物語ジャンルが秘めている潜在力を開拓しようとする意気込みが感じられる。

以下では、これら19世紀の試みにつながるような現代のBD表現について、古永・笠間両氏に具体的に紹介していただく。

2. ウバボ(潜在マンガ工房)以降の展開

古永真一

現代文学とBDの直接の接点は、ウリポ(潜在文学工房)とウバボ(潜在マンガ工房)に見出される。ウバボとは、ジャン=クリストフ・ムニユ、ルイス・トロンダイム、キロフェール、フランソワ・エロール、エティエンヌ・レクロアール、ティエリ・グルンステンらによる実験マンガの集団である。1992年に結成され、4冊の作品集(1997-2005)をアソシアシオン社から刊行している。クノーやペレックらがウリポで試みた拘束はウバボでも参照され、マンガというメディアの特性を遺憾なく発揮している。縮約、図像反復[一定のフレーミングのまま物語を展開]、リポグラム[絵もしくは言葉だけのマンガ、台詞に制

約を課したマンガ]、ハイブリッド作成 [他の BD 作家のキャラクターを別の作品に登場させる]、偶然性を取り入れた集団パフォーマンス、水増し [規則的にコマを増やす]、折りたたみ、ループする带状マンガ、クロスストリップ [水平や垂直、斜めからも読めるようにする]、「S + 7」 [元の図版のアイテムに関して辞書を参照し七項目ずらして描く] ……といった拘束である。

こうした拘束はいわゆるポストモダン文学でも散見され、文学と BD の間接的な接点になりうるものである。例えばウォルター・アービッシュの『ABC 順のアフリカ』(1974) は、ウバボでも実践されていたアルファベットのリプログラムをラディカルに実践している。また詩の分野では、ケネス・コークのヴィジュアル・ポエトリーがウバボと文学の類縁を考えるうえで参考になる。ウバボには「絵のないマンガ」の作品があるが、同時期にコークも吹きだしやコマ割りを使ったマンガ的な詩を書いていた。コークのライティングの授業では、学生にマンガの吹き出しを白紙で隠させ台詞を考えさせたが、これもウバボが実践していた遊戯であった。

ウバボの実験的なテクニックや精神は、BD ではマルク=アントワーヌ・マチューの『ジュリウス・コランタン・アクファク — 夢に囚われた男』(1990-2004) に受け継がれている。この作品がブライアン・マクヘイルの定義したポストモダニスト・フィクションの傑作だということはアン・ミラーの論文でも言及されているが、いささか具体例に乏しいこの論文を補うならば、例えばマチューが試みたページに穴を開ける趣向は、ポストモダン文学では B・S・ジョンソンの小説『アルバート・アンジェロ』(1964) という先例がある。ただしコマの形に切り抜くというマンガの特性を活かしたマチューの作品のほうが優れた効果を上げている。

このようにウバボは、ウリボとの関連のみならず実験的な BD やポストモダン文学にリンクさせることで、過去の文学作品の再評価を促して文学を活性化させると同時に、新たなグラフィック文学の可能性を示唆している。

3. 語りと描写

笠間直穂子

近現代漫画の分析にあたって、文学理論が参照されることはいまだ少ないように思われる。しかし、物語としての漫画を考えると、文学にまつわる理論的言説、とりわけ物語論は、有効な道具立てを提供するはずだ。その一例として、語り (narration) と描写 (description) の関係を取りあげた。

まず、ジュネット『フィギュール II』などを参考に、物語を進行させる出来事を記述する「語り」と、そうした出来事の背景を示す「描写」の区別を確認した。さらに、19 世紀半ば以降の小説で多用され、漫画や映画にも取りこまれ

た「視点描写」の技法に触れた。その上で、「描写」の使い方と、それが「語り」に与える効果という観点から、4人の現代BD作家の作品分析を試みた。

第一次世界大戦の前線を描いたタルディ(1946-)の『それは塹壕戦だった』(1993)は、それぞれ異なる兵士に焦点を当てた短い物語が連続する構成。ある兵士の見た戦場の光景が描写されるが、その兵士は間もなく戦死し、別の兵士に見られる風景の一部となる。「見る人」が次々にモノ＝死体と化す展開は、戦場における英雄の不在を示す。

タルディはさらに、パリ・コミューンに取材した『民衆の叫び』(ヴォートラン原作、全4巻、2001-04)で、横長の判型を採用し、情景描写に重点を置く。クライマックスでは、パリ市庁舎などコミューン史を象徴する建築物が見開きいっぱい描かれ、読者を圧倒する。街と、そこに集う群衆そのものが、物語の主人公に近い存在感をもつ。

ダヴォドー(1965-)の『農村!』(2001)は、高速道路建設計画に揺れる酪農家と周囲の人々を追ったドキュメンタリー漫画。農村風景と、その風景が工事によって変容していくさまを、豊富なアングルで見せる。結末では、高速道路を走る車の乗客の視点に立ち、一瞬で過ぎ去る村の光景を描くことで、村の生活と、経済効率を優先した建設工事の論理とを対置する。

こうしたルポルタージュ作品では、語り手が見たという「事実」が物語の核となる点で、描写は特別な位置を占める。ギベール他による『フォトグラファー』(2003-06)は、実在の報道写真家によるアフガニスタン滞在を、現地で撮影された写真を織りこみながら語る。イメージと物語の関係を考える上で示唆に富む作品だ。

一転して、ブリュッチ(1967-)の『モダン・スピード』(2002)は、日常を逸脱した、奇妙な夢の世界へ読者を運ぶ。所在定かならぬ現代建築を描いたコマが並ぶ冒頭ページは、謎めいた雰囲気醸し出す。物語と直接の関連をもたないこれらの建築物は、終盤で背景に再登場する。ここでは、描写は現実的な地理感覚を歪めるとともに、音楽に似たリズムを画面にもたらし。

以上の作品は、優れた現代BDを紹介する意味もこめて選んだ。文学と共通する物語芸術として漫画を読むことは、漫画研究にとっても、また翻って文学研究にとっても価値のある作業となるのではないだろうか。

人文学の現在と未来

映画『哲学への権利 — 国際哲学コレージュの軌跡』をめぐって

コーディネーター：西山雄二（首都大学東京）

パネリスト：水林章（上智大学）、藤田尚志（九州産業大学）

西山雄二

本ワークショップでは、映画『哲学への権利 — 国際哲学コレージュの軌跡』(2009年)を上映した後、人文学の困難と展望をめぐって討論をおこなった。

映画『哲学への権利 — 国際哲学コレージュの軌跡』は、1983年にジャック・デリダやフランソワ・シャトレらがパリに創設した半官半民の研究教育機関「国際哲学コレージュ」をめぐる初のドキュメンタリー映画である。映画は、歴代議長ミシェル・ドゥギー、フランソワ・ヌーデルマン、ブリュノ・クレマン、現副議長ボヤン・マンチュフ、新旧のプログラム・ディレクターであるカトリーヌ・マラブー、フランシスコ・ナイシュタット、ジゼル・バルクマンへのインタビューから構成される。この研究教育機関の独創性を例として、本作品では、収益性や効率性が追求される現在のグローバル資本主義下において、哲学や文学、芸術などの人文学的なものの可能性をいかなる現場として構想し実践すればよいか問われる。

本作で提示されるのは、大学の余白に研究教育制度を創設することの可能性、知の無償性の原理、教員の民主的で平等な関係、カリキュラムやプログラムの理念、学際性と哲学の関係の問い、経済的価値観と人文学の関係、研究教育の場所の問い、デリダの脱構築思想と教育の関係といった多様な論点である。関係者7名へのインタビューを通じて描き出され、問われるのは、大学、人文学、哲学の現在形と未来形である。これまで、日本、アメリカ東海岸、フランスの各地の大学やカルチャーセンターなどで30回以上の上映と討論がおこなわれてきたが、今回は初めての学会での上映だった。

まず、西山雄二が日本フランス語フランス文学会での本映画上映の意義を踏まえて論点を提示した。

1) 制度と運動 — 国際哲学コレージュは1901年のアソシエーション法で設立されており、既存の大学制度や研究所とは一線を画した市民団体である。とはいえ、コレージュは関係省庁から年間4,000万円ほどの資金援助を受けてもいる。デリダは国家や大学にアンチ（反対）ではなく、むしろ、国家や資本

の内部でそれらを問いに付す周縁的な哲学の場所をつくり出そうとした。デリダは「対抗」と同時に「近接」をも意味する両義的な語 *contre* (カウンター) にこだわる。国家や資本に近接しつつも、両者に対抗するのが哲学の脱構築的な作用なのだ。既存の大学制度はこうしたオルタナティブな運動によって活性化される。大学が在野かという二分法でも、大学と社会を同質化させるわけでもない。大学と在野の二分法を柔軟な仕方でも問うために、その境界で機能するような制度や運動をいかに構想すればよいのか。

2) 学際性 — 「フランス文学」や「哲学」は今日の大学においては古い看板となり、学際的な新しい四文字学部が幅を利かせている。「学際性 (*interdisciplinarité*)」に対して、デリダは「領域交差 (*intersection*)」を提唱し、「哲学」という古い学問分野はどの程度他の学問分野を許容することができるのか、と問う。既存の学問分野を和合させて学際性を確立するのではなく、他の学問分野に耳を傾けることで哲学それ自体がいかに変容しうるのか。こうしたデリダの問いは、学際的な学部が優勢となるなかで、旧来の「フランス文学」はいかなる領域交差をもたらすことができるのか、という問題意識とも関係するだろう。

3) 批判的思考 — 本作ではインタビューーたちが、人文学的な教養とは批判的な抵抗の思考である、と発言するが、彼らの堂々たる態度には驚かされる。これは日本の大学では聞かれなくなって久しい言葉ではないだろうか。人文学と批判的思考の関係を今日、どのように考えるべきだろうか。

次に、水林章はフランスにおける人文学 *les Humanités* の深刻な危機について現状報告をした。グローバル化にともなう「世界の全面的な商品化」のなかで、経済と市場の圧倒的な優位が生じ、「消費者」によって「市民」が圧倒されている。「市民」とは公権力から自由に自立しようとする存在であるが、そうした共和主義的市民の原理の衰退は学校教育の衰退と軌を一にしている。

教育の形態としては、教育の無償原理が揺らぎ、高額なビジネス・スクールが人気を博し、高位の学位のために高額な授業料を設定する大学も登場している。教育の内容としては、経済的な効率性や有用性が教育を左右し、人文的教養の終焉とさえ形容しうる事態が生じている。実際、1999年以降の欧州規模の高等教育再編「ボローニャ・プロセス」は、産業界の要請に応じる形で教育の市場化・商品化を押し進めている（「*harmonisation* (融和化)」と呼称される）。その結果、「思考の拠点を求める教育」は「市場での競争能力の獲得としての教育」に変貌しているのだ。

西欧において人文学が消滅するとは、解放のプロジェクトとしての〈啓蒙〉の消滅を意味する。西欧における批判的理性＝〈啓蒙〉とは限界を定める能力であり、「自分はどこにいて、どこに向かい、どこで立ち止まるべきなのか」を

見定める力である。こうした事態に対してフランスでは危機意識と抵抗の意志が見られるが、日本では「脱知性化」(1997年の加藤周一の表現)を通り越して、知性の根こそぎの抹殺が起こっていないだろうか。人文学の(再)構築を意識したフランス語やフランス文学の教育をいまこそ考えるべきだ、と水林は言葉を締め括った。

そして、藤田尚志は、水林が共著『思想としての〈共和国〉』(みすず書房)で引用したドゥブレの文言「共和制においては、社会は学校に似ていなければならない。その場合の学校の任務はといえば、それは何事も自分の頭で考え判断することのできる市民を養成することにある」を引く。ここでは学校と社会の対で共和制が説明されているが、学校は権力からの空白状態ではなく、国家の意志が現われ出てくる場でもある。それゆえ、社会と学校の関係にいかにかに国家が介入するのかを繊細な仕方でも認識することが重要ではないだろうか。

教育における公共の力について言えば、フランス哲学の重要な展開は大学の外でなされてきた。コレージュ・ド・フランスは反大学的な役割を果たしてきたし、啓蒙主義以来、コント、テーヌ、ルナンなど19世紀の哲学は大学の外で発展してきた。教育の公共性が多層的なものであることは再確認されるべきだろう。

また、藤田は、大学の現状を踏まえた上で、教育の有用性と無用性、有償と無償をただ対立させるのではなく、条件性と無条件性を新たな関係に置き直し、交渉をおこなうことが重要だとした(この点に関しては、藤田がデリダ『条件なき大学』の批判的読解をおこなった論考「条件付きの大学」〔西山雄二編『哲学と大学』未来社、2009年所収〕を参照されたい)。

本映画とその巡回上映に関して言えば、イメージや映像を文学研究の対象とすることは研究の一ジャンルとして確立したが、自分がイメージや映像を主たる表現媒体として研究成果を発表するのは希有な例であるだろう。しかも、この映画はたんなる「お説拝聴」のドキュメンタリーに終わっていない。一日本人思想研究者が対等な立場でコレージュの問題点をも引き出しえているからだ。そして、映画『哲学への権利』はたんなる一映像作品の名ではなく、西山によって実施される日本内外で巡回する上映運動そのもの名である。

会場からは、「映画ではアメリカの比較文学とデリダの脱構築思想が否定的に対置されていたが、むしろ両者には親近性があるのではないか」「自立した個人を育成し、批判的思考を醸成する場、異質なものをも呼び込むような場をつくりだすにはどうすればよいか」といった質問を受けた。

たしかに、デリダの思想は1960年代にまずアメリカの大学、主に比較文学の領域で受け入れられ、世界的な名声を獲得した。それゆえ、彼が国際哲学コレ

一ジュを創設したのは、アメリカ的な学問状況を考慮しつつ、フランスの閉鎖性を打破しようとする意図があった。また、場の問いについて言えば、場をつくり出すのは人である。その点で、創設者デリダの振る舞いは興味深く、映画のなかでは、「デリダは友愛の身振りでもってコレージュから遠ざかった」「デリダは彼なりの歓待精神でコレージュに敵を招き入れようとした」と語られる。デリダ独特の友敵のポリティックスが、コレージュの開放性に深く関わるのである。

学会での上映だったが、会員以外の参加も多く、150名ほどが来場した。実際、回収した聴衆のアンケートでは次のような回答も寄せられた。

「早稲田大学文化構想学部の一年生で、[...] 第二外国語としてドイツ語を学んでいる私は、この会場ではある意味で異邦人のような感覚を味わいました。ただその感覚は不快な、気まずいものではなく、開かれた、という出会いの驚きとでも言える感覚でした。」

「将来の進むべき方向性も、ある特定の職業に就くことに疑いを抱えています。ですが、何らかのカタチでこの世の中に出たいと思い、日々色々なところに足を運び、学び、吸収しようと今は努めています。上映会そして討論会を続けていただきたいと思います。私も少しずつですが、「何か」に向かって（いえ、「何も」ないかもしれませんが）歩んでいきます。」

今回は映画上映と討論という変則的な時間編成だったが、承諾して頂いた大会実行委員会には深く感謝する次第である。

II 書評

中内克昌『アキテーヌ公ギヨーム九世 最古のトルバドゥールの人と作品』、九州大学出版会、2009年

評者：井上富江（別府大学）

著者中内克昌氏は、1969年に福岡大学人文学部に奉職され、以来それまで温めてこられていたフランス南仏文学、特に南フランスを活躍の場としてヨーロッパ中世に花開いたトルバドゥールの研究に打ち込まれた。それまで研究する人の限られていた分野にあえて飛び込まれた理由は、詩歌を吟じながら宮廷か

ら宮廷へ、町から町へと各地を巡り歩いていたトルバドゥールのロマンに惹かれたからだと著者のあとがきにも書かれている。

この著作は著者が福岡大学人文学部論叢に1991年から、1992年、1994年、1996年、1997年に引き続き執筆された「アキテーヌ公ギョーム九世」と、同じく論叢に執筆された「中世南仏詩における『アムール』について」(1970年)「トルバドゥールと政治風刺」(1971年)「トルバドゥールにおける『愛』の系譜」(1973年)「トルバドゥールの伝記」(一)(1976年)、「オクシタニー言語事情」(1982年)をもとに執筆されたものである。

ギョーム九世といえば当時のフランス王よりも大きな領土、すなわちポアトゥ、リムーザン各地方のロワール河畔からガスコーニュ地方、トゥールズ伯領との国境近くのピレネー山脈にまでおよぶ広大な地方を持ち、実にフランスの領土の1/3近くを占める大領主であった。彼自身はその領土を維持、守るために言い表すこともできないような努力をしたことがこの本に書かれているが、天性のエピキュリアンであり、豪放磊落、並ぶもののないドンファンとしてのイメージが定着している。

南仏に花開いたトルバドゥールたちの祖であり、ヨーロッパの俗語(古オック語)で書いた最古の詩人でもある。何よりもその才能は孫娘エレオノール・ダキテーヌによって受け継がれ、南仏の宮廷文化の礎を築いたことは否定することのできない事実である。この著作はそのギョーム九世の人と作品を丁寧に紹介するものである。

彼の作品は11編残されているのだが、その作品が我々の目に触れることは、きわめて珍しい。大抵のトルバドゥール紹介文中でもただ「最古のトルバドゥール」であり、「女性に対する大胆な官能的な叙述の詩が多く残されている」程度のものしかない。ましてその他の繊細な、女性を讃える、その後のトルバドゥールの詩に共通のFin' Amor(フィナモール)を歌う詩が紹介されることは稀である。特に氏が研究した頃は資料も限られ、研究には多大の時間と努力が必要であったことは容易に想像がつく。今でこそCDもCD-ROMも発行され、そのメロディーも労せずして聞ける便利な著作が出版された。トルバドゥールの文学は思いの外簡単に聞け、詩もコンピューター上で手に入れられる環境になったが、氏が研究された頃はそんなものは出版されていなかった。ひたすらRazo、Vidaと呼ばれる詩人の伝記を読み、その詩を古オック語で読む為に辞書を引きまくったであろう。

この本の中にはギョーム九世の作品すべてが原文のまま紹介され、作品の解説と詩型の説明もきちんとされている。今まで謎の多かったギョーム九世の生涯もきちんと叙述されている。RazoもVidaも縁のない読者も、そのファブリオともまがう少々下品な詩から優美なフィナモールを歌う詩まで、通して楽しむことができる。訳したくもない卑猥な表現も、嫌な感じを与えることのない

訳でさらりと流している。全ての作品を通して、その人となりを感じ取り味わうことができるというのは、我々文学に携わる者としてこのうえない幸せである。メロディーについてはほとんど触れられていないのは少し残念ではあるが、4角形の楽譜も残され、彼自身の宮廷はもちろん、あちこちの宮廷で歌われたものなのでここに資料を紹介しておこう。CDについては Gérard ZUCHETTO の *Terre des Troubadours* (éd de Paris, 1996), CD-ROM に関しては Peter T. RICKETTS の *Concordance de l'occitan médiéval I*COM I*), Turhout, Brepols, 2000 をお薦めしたい。

まずは手始めにこの著作を読まれ、興味を持たれた方は上の著作を楽しんでほしい。

鷺見洋一『『百科全書』と世界図絵』、岩波書店、2009年

評者：小関武史（一橋大学）

本書は意外な始まり方を見せる。冒頭に置かれているのは、中学生時代の著者の二つの読書体験である。一つは菊池寛の『恩讐の彼方に』、もう一つはコナン・ドイルの『赤髪組合』である。鷺見洋一少年は、二つの短編に共通する主題を漠然と感じ取っていた。すなわち、巨大量である。『恩讐の彼方に』では、侍上りの旅の僧が過去の罪科を償うために、20年以上にわたって槌とのみをふるってトンネルを掘る。『赤髪組合』では、質屋の主人が架空の組合に迎え入れられ、会員の仕事として『大英百科事典』のAの項目をひたすら筆写する。何と壮大な徒労であろうか。しかし、その救いのない姿にこそ、人生の真実は宿るのではないか。少年の胸に去来したこの思いは、やがて研究者・鷺見洋一の信条となる。小さなものの巨大な蓄積は、確固たる一つの世界を成立させる。本書ではそれを「世界図絵」と名づけているのだが、さまざまな世界図絵に真正面から挑み、その巨大量をものともせずコツコツと地道な努力を重ねること——それこそが著者の研究スタイルなのである。

第I部は「世界図絵の変容と近代」と題され、三つの章を含む。「巨大量、収集、分類」と題された第一章では、ヨーロッパにおける世界図絵の歴史が跡づけられる。それは古代記憶術に始まり、北方ルネサンスにおける世界風景画（ブリューゲル等）、ラブレールが展開する網羅的記述、書誌や博物誌を経て、『百科全書』に至る。それらはみな、あらゆる事物を収集し、分類し尽くそうとする情熱によって特徴づけられる。第二章「過剰・集積論」では、現代における集積の事例がいくつか紹介され、世界図絵の系譜が今もなお受け継がれているこ

とが実証される。続く第三章「世界図絵のなかの水車」では、自然と社会の境界に位置する水車という装置に注目し、水車が世界図絵の中心として機能していることが、豊富な実例によって示される。黒澤明の『七人の侍』からシューベルトのリーダーまで、著者の筆は古今東西を縦横無尽に駆けめぐる。

第Ⅱ部は『百科全書』の図版と一八世紀」という題のもとに二つの章を含む。『百科全書』が世界図絵の典型例であることは第Ⅰ部で論じられた通りであるが、ここでは図版に焦点が当てられる。第四章の標題「整合と惑乱」が示すように、すべてを整理・分類しようとする執念の先には、見てはならないものを暴き出すという暗黒がある。豊富な図版を一瞥するだけでも、まがまがしい世界が垣間見える。第五章「図版のなかのフランス一八世紀」では、もう少し広い視点から『百科全書』以外の図版が分析される。

最終第Ⅲ部は「理性の夢」を論じる。第Ⅱ部で確認したように、分類への志向は時として常軌を逸した情熱へと昇華する。著者はその具体例として、第六章「繁殖する自然」では博物図鑑を、第七章「一八世紀の夢」では気球を、それぞれ詳しく取り上げる。

特筆すべきは、本書それ自体もまた百科全書的な性格を備えていることである。図版が数多く盛り込まれていることもそうだが、それはどちらかというとな層的な類似である。本書を真に『百科全書』に結びつけているのは、コラムを随所に散りばめるといった趣向である。コラムのどこが百科全書的なのか、と訝る方もあるだろう。一例を挙げよう。現代におけるアーカイヴについて論じた文章を読み進めていると、読者は不意に図書館についてのエッセーに遭遇する。すると、異質な文章が微妙なずれを含みながら響き合い、アーカイヴをめぐる問題の射程が立体的に開けてくるのである。十数個に及ぶそれらのコラムの大半は、もともと学生や一般読者を対象に書かれたものであり、他日論文集に組み入れることを想定したものではない。ところが、それらのコラムが論文の中に割り込むことにより、不思議な共鳴が発生している。ここで『百科全書』と訳される *Encyclopédie* の原義が「円環をなす知識」であることを想起しよう。そして、項目という単位で分離された知識をつなげるために、ディドロたち編集者は本文の中に「他項目への参照指示」を組み込むという工夫を編み出した。『百科全書』の読者はその指示に従って、知識の連環を自ら構築してゆく。本書におけるコラムは、本文の記述から送られた参照先に他ならない。

鷲見洋一は内外に知られた研究者だが、日本語による論文集は本書が最初のものである。研究成果が一冊の本にまとまるまでに長い年月を要したのは、コツコツ型の宿命なのかもしれない。しかし、今や実りの秋が到来した。本書を皮切りにして、著者の論文集があと二冊刊行される予定だと伺っている。次はどのような世界に連れて行ってもらえるのか、今から楽しみである。

大矢タカヤス『地図から消えた国、アカディの記憶：『エヴァンジェリンヌ』とアカディアン人の歴史』、書肆心水、2008年

評者：小畑精和（明治大学）

カナダにはケベック州以外にもフランコフォンがいる。ケベックの西隣のオンタリオ州はもちろん、西部アルバータ州にもいる。中でも東隣のニュー・ブランズウィック州は、州人口のおよそ三分之一を仏系住民が占める。彼らはアカディ人（アカディアン）と呼ばれている。しかし、ケベックに比べ、彼らの存在はあまり知られていない。

彼らは現在のノーヴァ・スコシア州を中心に住んでいたが、ケベックよりも先に英領となり、ケベック人とは異なるアイデンティティを持っている。英仏植民地戦争が激化してきた1755年には有名な大追放が行われる。英領内にいる仏系の住民は危険分子だと見なされ、強制的に南部のジョージアなどに移住させられたのである。手当たりしだいに船に乗せられ、一家が離散し、恋人たちが引き離された例も少なくなかったという。この悲劇をアメリカ合衆国の詩人ヘンリー・ワズワース・ロングフェローが1847年に『エヴァンジェリンヌ』*Evangeline*として著した。この作品は1930年には斎藤悦子によって日本語訳されて、岩波書店から出版されている。それが大矢タカヤスの手によって再び日本語に訳された。

この長編詩はちりちりになっていたアカディアンたちの胸を衝き、今では存在しない彼らのヴァーチャルな「祖国」を夢想させ、絆を回復させるきっかけになっただけでなく、多くの言語に訳され、世界中の人たちにアカディの悲劇を知らしめることになった。『エヴァンジェリンヌ』は失われた歴史を文学が取り返した好例として大矢の心を動かし、翻訳だけではなく、その歴史の再発掘へと向かわせたのだろう。実際、大矢は名作の再訳という大業だけにとどまらず、第二部で、「アカディの歴史」を多くの資料を用いて再構築している。

そこで大矢が明らかにしていくのは、「（英仏）二つの権力の間をなんとか泳ぎぬけようとしてきた」アカディアンの努力であろう。アカディはケベックと同時期にフランスによって植民が進められながらも、ある時期からケベックよりも冷遇され、それでもイギリス領になったあとも、カトリック信仰・フランス語・フランス文化を守ろうとしてきた。この第二部を読めば、アカディがケベックとは異なるアイデンティティになぜ拘るのがよく理解されよう。

アメリカへ追放されたアカディアンはその後イギリス領として残った故郷へ戻ることを許され、帰ってくる。中には牛車で遠路旅してきたものもあった。その苦難を描いたのがアントニヌ・マイエの『牛車のペラジー』である。彼らが戻った地にはすでにアイルランドや他の英系地域からの移民が入植していた

ので、隣の地に居を構えるしかなかった。「大追放」を逃れて山に隠れた者たちと、こうして戻って来た者たちの子孫が現在ニュー・ブランズウィックに住む仏系の人々なのである。

アカディアンの中には、もともと仏領で仏系の人々が住んでいたルイジアナに移住した者もいた。彼らの子孫がケイジャンである。ケイジャンはアケイジャンの訛ったものである。今ではアメリカ合衆国の一部になってしまったケイジャンも歌にフランス語を残している。その代表的な歌手がザッカリー・リシャルである。彼は「俺のルイジアナ」で「俺たちがカナダ人だってことを忘れちゃいけないよ、坊やたち娘たち、俺たちやアメリカ人より先にルイジアナにいた、(中略)、お前たちのパパとママはアカディから追放された、フランス語を話すという大罪のために、でも、素敵な所をみつけてくれた、ルイジアナをありがとう、神様」とフランス語で歌う。「大追放」の記憶は失われず、しっかりと歌い継がれているのである。

ケイジャンではないが、「大追放」の記憶を歌っているグループがいる。ボブ・ディランのバックを務めたので有名なザ・バンドである。もともとアメリカのグループであったが、トロントで成功し、活動の拠点をカナダに移し、メンバーも大半がカナダ人になる。彼らは「アカディの流木」で、最後の部分だけフランス語でこう歌っている。「君は知ってるかい、アカディ、僕はホームシック、君の雪は、アカディ、陽に溶けて涙になる、今行くよ、アカディ」と。ここにも「大追放」後にアカディの土地へと戻って行く人々の記憶が鮮明に留まっている。

毎年八月になると世界各地からアカディアンたちがニュー・ブランズウィックに集まって祭典を開く。民族に必要なのは共通の言語でも共通の文化でもなく、共通の記憶なのである。アカディアンの場合、それが「大追放」であることは間違いあるまい。

昨年カナダ国営放送 SRC のニュース番組で、偶然大矢のことが取り上げられているのを見た。日本でもアカディの失われた歴史が教えられているといった内容のものであった。大矢の情熱にあふれた講義風景が今も印象に残っている。

評者：塚本昌則（東京大学）

「近代的な技術の世界と、神話の古代的な象徴の世界の間には、照応関係の戯れがある」、とベンヤミンは言った（『パサージュ論』N2a, 1）。ヴァレリー（1871-1945）が同時代の科学に影響を受けていたと言っても誰も驚かないだろうが、そこにベンヤミンのように神話的な思考を見ていたとしたらどうだろうか。木村正彦が、『知の神話 — ポール・ヴァレリーにおける科学的思考の誕生と発展』で追求しているのは、まさしくヴァレリーが科学をひとつの「神話」と見なしていたということである。

木村によれば、ヴァレリーは同時代の科学に強く興味を引かれながらも、それを自分の思索の中に取り入れるとき、その限界を明確に意識していた。この詩人にとって、科学はあくまで「測定」によって可能となったある「ものの見方」、ある「考え方」にすぎない。それは人間理性の必然的な結果などではなく、「都合のいい偶然の出来事、常軌を逸した人間、不条理な欲望、奇妙奇天烈な問い、難題好きの人間、暇、悪癖、ガラス発見のもととなったあの偶然、詩人の想像力のおかげでできた」（『カイエ』V, 290 [1914]）ものなのである。

それにしても、この言葉は、「飽くなき厳密」を中心紋とする「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説」（1895）のヴァレリーと、本当に同一人物の発言なのだろうか。木村正彦は、年齢に応じて、また量子力学（1900）と相対性理論（1905-1915）の発展という大きな変化を前にして、ヴァレリーの科学に対する態度が複雑に変化してゆくさまを克明に追っている。木村によれば、ヴァレリーは十代の時に読んだジュール・ヴェルヌの空想科学小説を通して科学的思考と出会い、また科学の限界を見定めたポワンカレの強い影響を受けていた。古典物理学の思考モデルをさまざまな形で参照している「レオナルド」執筆時——とりわけダ・ヴィンチの伝記作者セアーユ、ポー、ラプラス、ファラデー、マクスウェル、ケルヴィン——については、木村はヴァレリーが当たった文献を特定し、「科学的思考」をいかに鑄直し、自分なりのやり方で再公式化したかを分析している。最後に、量子力学と相対性理論の時代以降、ヴァレリーはそれらの新しい見方を吸収しようとしたが、同時に確率によって記述され、感覚で捉え得るものではなくなった物理学に批判的なまなざしを向けていたことを解明している。

時期によって態度の変化はあっても、ヴァレリーが科学を「知の神話」と見なしていたという主張は、考えてみればきわめて正当なものだ。ヴァレリーは絶え間ない内的変化を生きる人間を記述しようとしていたのであり、その作業

を厳密に進めるためのモデルのひとつを「科学的思考」に見出していたにすぎない。ヴァレリーは常々、あるがままの人間の姿を捉えるために、人工性が不可欠だと考えていた。虚構、擬装、神話を通さなければ、生きた現実である変化しつづけるものを描くことはできない。だからといって、そのための手段である科学的抽象を偶像化し、生きている現実を犠牲にする気はまったくなかった。最後の検証は、彼が自分の頭で考え、本当に思考の対象を再現できるかという点にかかっているのである。

ひとつだけ、木村正彦が詳細に検討している時間論（『タイム・マシン』評 1899）を例に挙げてみよう。この H・G・ウェルズの小説の書評の中で、ヴァレリーは科学が通常、時間をひとつの点が直線的に空間を移動する「一次元の連続量」として計測されていることを取りあげ、この考え方を批判する。そのために「矛盾律」——「あるものは、同時に A でありかつ A でないということとはできない」——が確立されていない時代に遡り、時間がまだ矛盾の可能性にみちていた状態を想像してみる。すると「矛盾律」が消滅して、もうひとつの原理、その言語の領域への投影が「矛盾律」にほかならないようもうひとつの原理が認められるように思われた。それは「すべてを一度に考えることはできない」という素朴な言葉で言い表される事態だが、「矛盾律」という言葉で言い表される事態よりはるかに広い可能性をはらんでいる。「もし魂が存在しなかったら、時間ははたして存在するのか」というアリストテレスの問いを深めたような何か、「時間の幾何学」となった心理学の可能性がそこには示唆されているというのである。

このような大問題を短く要約することは難しい。詳しくは書評と同時期の『カイエ』や、ヴァレリーが影響を受けたボワンカレのテキストを縦横に引用しながら『タイム・マシン』評を分析している木村の論考を当たっていただきたい。しかし、ヴァレリーが科学の原理をうのみにするのではなく、この「知の神話」を解体しながら自分の思考を組み立ててゆく手つきは十分に理解していただけただけのではないだろうか。

これほど広汎な事象を扱っているため、『知の神話』にまったく弱点がないわけではない。例えば、フロイトへの言及では、力動的な無意識概念がまったく問題にされていない。しかし、ヴァレリーと科学との関係について、独自の視点からこれほど詳細に論じた論考は稀なのだから、こうした欠点はあまり目立たない。後はヴァレリーにとって「神話」がどのような射程を持っていたのかを、筆者がより明確にすることを期待したい。

評者：和田章男（大阪大学）

本書は、ブルースト研究新世代を代表する見事な著作である。1970年代以降、ブルースト研究の中心は草稿研究であった。日本人研究者も草稿に基づく生成研究に大きく貢献してきた。しかしながら、多くの草稿を収めたプレイヤード版の刊行、現在進行中のブルーストの草稿帳75冊の出版という荘大な事業によって、総まとめの時代に入った感がある。新世代の研究者たちはもはや草稿にこだわることはなく、より広い視野からブルーストの作品を考察する。文学テキストを同時代の文化的・社会的コンテクストの中に位置づけ直し、相対化する。草稿研究が問題にしたテキストの「生成」という概念を引き継ぎながら、同時代の多様な言説との関係性において作品の成立過程を検討する。そのために用いる方法論は決して新しいものではない。人文学の研究における本道である「文献調査」こそが彼らの大いなる武器なのだ。

小黒昌文著『ブルースト 芸術と土地』もまた丹念な文献調査の結実である。本書の末尾に、各章ごとに分けてまとめられた参考文献は、それ自体で貴重な研究成果である。総数は300点を超える。しかもそのうちのおよそ半数は、ブルーストの時代に発表された書物や新聞・雑誌等の記事であって、一次資料と呼べるものだ。ブルーストについての先行研究はその一部にすぎない。むしろ、テーマにしている文化・社会事象に関わる言説をできる限り網羅的に調査する。作家が読んだかどうかは必ずしも問題にしない。同時代に書かれ、なんらかのメディアを通じて流布していた言説を丹念に蒐集し、ブルーストのテキストとの異同を論じていく。豊富な資料に基づく、当時の知的潮流の生き生きとした再現そのものが本書の大きな魅力をなし、20世紀初頭のフランスにタイム・スリップしたかのようだ。だが、小黒氏がこのような言説の網目の中から浮かび上がらせるのは、ブルーストの文学・芸術思想形成の軌跡なのだ。表紙のカバー写真「光の道」は、暗闇の中でのブルーストの孤独な創造活動の輝かしい生成過程を象徴しているようで、本書の目的を明かしている。

2005年に京都大学に提出された博士論文「ブルーストとその時代——芸術作品と土地をめぐる研究」を加筆訂正し、書き下ろしの最終章を加えた本書は、ブルーストの小説創造を「その時代」に置き直しながら、特に〈土地〉*pays*を切り口として作家の芸術観形成を跡づける。芸術は〈土地〉と「絆」を持つべきか、〈土地〉とは「切断」されるべきものか、という問が全編を通しての主要な論点である。『失われた時を求めて』において〈土地〉が重要なテーマとなっていることは言うまでもないが、ブルーストが大きな影響を受けたジョン・ラスキンの芸術思想ばかりでなく、第三共和政下の愛国主義的雰囲気の中で、モ

ーリス・バレスをはじめとする作家たちは、〈土地〉に「根ざすこと」の重要性を強調する。ナショナリズムの言説との対決のなか、プルーストはルーヴル美術館の「モナ・リザ」に芸術作品の本質を見出しつつ、〈土地〉から切り離されたところこそ、芸術の普遍的領域を見い出していく。

『サント=ブーヴに反論する』に収められるはずであったネルヴァル論は、〈土地〉との「絆」か「切断」かを問う重要なテキストとして詳細に論じられる。プルーストが反論しているジュール・ルメートルやモーリス・パレスによる伝統主義的ネルヴァル観は、20世紀初頭に見られた「古典復興運動」の流れの中に位置づけられるものとして、広範囲に渡る時代の潮流が明らかにされるとともに、それらの言説に反抗しつつ自らの美学を確立していく作家の思索が跡づけられる。特に同論においても言及されている批評家アンドレ・アレーは、『そぞろ歩き』という連作においてフランスの伝統的な土地を称揚し、プルーストが芸術観を形成していく上で少なからぬ役割を果たしたであろうことが論証される。

ヴェネツィアとコンブレ、世紀末に流行した歴史の町と、田舎の平凡な架空の町とともに、プルーストの小説において重要な役割を持つ。サン=マルコの鐘楼の倒壊（1902年）という出来事を踏まえつつ、母が立ち去った後のヴェネツィアは無意味な町となることに著者は着目する。また、第一次世界大戦中のランス大聖堂の爆破という歴史的事実を背景としながら、プルーストは架空の町コンブレをパリの東北部へ移動させ、戦争によって破壊させてしまう。公的記憶を担う歴史的な町も、私的な記憶の町も、小説最終部で「崩壊」させることによって、〈土地〉に根ざさない文学・芸術観の確立が寓意されているのだ。かくして、特定の時空間から「切断」された冒頭の睡眠の場面こそは、作者の芸術観の象徴として、プルースト的文学世界の入口となっているとの論も説得的だ。

小黑氏の恩師であった故吉田城氏の博士論文は、プルーストがラスキン美学を乗り越えて、自らの芸術観を確立していく過程を、草稿において実証したものだ。小黑氏の研究もまた、異なった方法でプルーストによるラスキン美学の超克を論じたものである。本書はまさしく恩師へのオマージュともなっているのだ。

書評対象本推薦のお願い

日本フランス語フランス文学会では学会広報誌 **cahier** および学会ウェブサイトにて公開する書評作成にあたり、広く対象となる本を募集しています。つきましては、下記の要領により、書評対象として相応しいと思われる本をご推薦いただければ幸いです。

なお、ご推薦いただいた本は資料調査委員会で集計し、書評する本を決定させていただきますので、必ずしもご推薦いただいた本の全てが書評されるわけではありません。

◇目的

日本におけるフランス語、フランス文学研究の成果を収集し、権威付けされた書評ではなく、内容紹介的な書評により公開する。

◇書評の対象

原則として、過去1年間に刊行され、その内容から広く紹介するに相応しい学会員による著書を対象とする。翻訳なども含み、日本で刊行された著書には限らない。フランス文化、映画などに関する著書も排除はしない。

◇推薦要領

学会員による他薦に限ります。著者名・書名・出版社名・発行年月を明記の上、紹介文（200字程度）を付してください。著作のみの送付については対応しかねますので、ご遠慮ください。

◇締め切り 毎年3月・9月末日

◇宛先 日本フランス語フランス文学会資料調査委員会までお送りください（メール可）。

cahier 06

編集 資料調査委員会

発行日：2010年9月1日

日本フランス語フランス文学会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館 505

TEL:03-3443-6671 FAX:03-3443-6672 MAIL:sjllf@jade.dti.ne.jp